Oh!さっぽろ

デザイン思い出せますか
2千円札は一体どこへ

国内で三億枚以上出回っているはずなのに、まず姿を見ないモノがある。まもなく発行から五年となる二千円札だ。二〇〇〇年七月十九日、ミレニアム（千世紀）と沖縄での主要国首脳会議（沖縄サミット）にちなんで華々しく登場。一万円以来四十二年ぶりの新額面紙幣として景気刺激効果も期待されたが、今や、デザインすら思い出せない人も少なくないだろう。二千円札は一体どこへいったのか。　（佐藤元治）

札幌のパスタ店　お釣り用に欠かさず

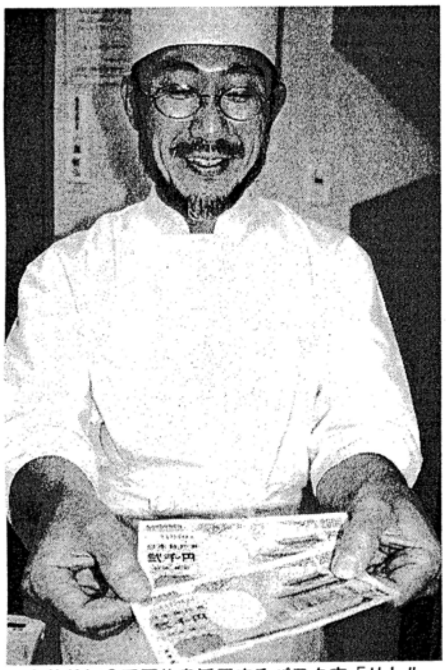
■反応は上々

二千円札を活用しているパスタの店があると聞いて訪ねてみた。

札幌市北区新琴似二の五、閑静な住宅街にある「リトル・フォールズ」。かんきつ系で甘酸っぱく仕上げた「たらこと香草のパスタ」（大盛りで千円）を味わう。支払いで五千円札を出す。お釣りとして二千円札二枚が戻ってきた。

「この五年間、二千円札を欠かしたことはありません」と店主の小滝敏弘さん（四二）。千円札だけ用意するのと比べ、かさばらないのがメリット。受け取った客も「珍しいね」「久しぶりに見た」と喜んでくれる。だが、二千円札で支払う客は、まずいない。「お釣りを用意するように、銀行での両替は日課です」

ごくたまに二千円札の受け取りをいやがる客もいた。「自販機で使えないというんですよ」。日本は普及台数で米国に次いで二位、売上金額ベースでは世界一の自販機大国。「普通のお店で使えば何の問題もないのにね」


お釣りに２千円札を活用するパスタ店「リトル・フォールズ」の小滝敏弘さん。「うちでは一番使う紙幣です」

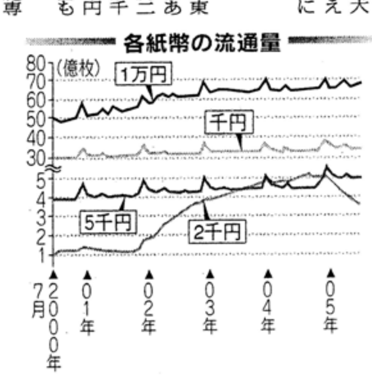
自販機ATM　ニーズなく使用不能

■投資は無理

日本自動販売協会（東京）によると、全国にある清涼飲料の自販機約二百万台のうち約90%が千円札を使えるが、二千円札を使えるものは一台もないという。

なぜか。宇佐見正紀専務理事は振り返る。「二千円が出た直後は導入すべきか悩んだのも事実。しかし消費者から要望がなかった」。現在は昨年十一月発行の新千円札の対応で手いっぱい。「これだけで業界全体の投資は二百億円。二千円は、お札の識別センサーだけでなく釣り銭の計算システムも変えなければならない。到底無理」

使えないのは他の機械も同じだ。二千円札対応の券売機はJR北海道、札幌市営地下鉄ともゼロ。北洋銀、道銀の現金自動預払機（ATM）でも、入金はできるが出金はできない。「市中で使われておらず、お客さまのニーズがない。ATMを改修するだけの投資効果が見込めない」（北洋銀）という。



一時的だが、二千円札の流通量は五千円札を超えていた＝グラフ参照＝。だが昨年八月の五億千三百万枚をピークにじわじわと減少。この六月には三億六千百万枚にまで減った。

「昨年十一月発行された新紙幣の影響もある」と日本銀行発券局。最新の偽造防止対策が施された新紙幣への切り替えが優先される分だけ、二千円札の普及が後回しとなっている。

「他のお札と見分けがつかない」という声も多い。特に視覚障害者にとっては深刻だ。指で触れると券種が分かる識別用のマークは入っているが、札幌市視聴覚障がい者情報センターは「新札以外は判別不能」と指摘する。視覚障害者の中には、五千円札を基準に「それが小さければ千円、大きければ一万円」と判別している人が多いが、「二千円札は五千円札とほぼ同じで区別がつかない」（同センター）という。

人気のない二千円札は、金融機関の金庫でただただ眠っている。造幣作業も二〇〇三年度の一億一千枚を最後に中断。発行以来の五年間の累計は八億八千枚で、同期間に印刷された紙幣の5%にすぎない。

ご当地沖縄は　発行5年祝い式典も

■ランチ割安

そんな中、じり貧ムードをぬぐい去ろうと立ち上がった地域がある。首里城の守礼門をあしらった二千円札を「ご当地紙幣」と位置づける沖縄県だ。

この四月、県銀行協会や沖縄観光コンベンションビューローが「二千円札流通促進委員会」を組織。各銀行は両替機の九割を出金可能に改造し、使うと割安となるホテルのランチも登場した。

県内でスーパーなど七十四店舗を展開するサンエー（宜野湾市）は五月から、那覇市の大型店「那覇メインプレイス」などでお釣りに二千円札を活用している。同店での使用枚数は月間六万枚に上る。同社販促企画部の吉田安之部長は「地元の人はもちろん観光客にも好評です」と手応えを語る。

「みんなで使おう二千円札。」という表示を札幌でも見つけた。泡盛と沖縄音楽の店「宮古根（みゃーくに）」（中央区南三西五）。しばしば沖縄好きの客が支払っていくという。

試しに銀行で一万円を両替してみた。ほぼ待ち時間なしで二千円札五枚を受け取れた。那覇では十九日に発行五周年記念式典もあるそうだ。紙幣表の守礼門を眺めつつ、しばし南の島に思いをはせた。

宮古根に掲げられた「みんなで使おう二千円札。」の表示。沖縄観光コンベンションビューローが作製した

一橋大経済研・北村教授に聞く
活用される時代が来る

二〇〇〇年の沖縄サミット記念紙幣と見られがちの二千円札。この額面は果たして使い勝手が悪いのだろうか。「数学的に考えると最適な紙幣」と話す一橋大経済研究所の北村行伸教授（金融・財政論）に聞いた。

◇

日本銀行の発行残高（流通量）を見る限り、二千円札は五千円札とそう変わらない量が出回っていることになっています。しかし実際は、まずお目にかからない。銀行など金融機関がため込んでしまっているのです。

一番の問題は、預金者がお金を出し入れする現金自動預払機（ATM）が、二千円札を吸い込むばかりで、はき出す仕組みになっていないことです。多くのATMは、一万円札と千円札のみ出金できる構造で、五千円、二千円を収納するスペースがないのです。

とはいえ、銀行の怠慢とばかりとも言えません。昨年発行された新紙幣のように既存の額面ならばATMの読み取り機構の改修で済みますが、新たな額面が加わる場合は、出金の計算式自体の変更が必要です。費用も時間もかかります。

ところが、二千円札は突然の登場でした。小渕恵三首相（当時）が発行計画を発表したのは一九九九年十月。わずか九カ月前でした。銀行側も金融危機の直後でシステム変更の余裕などない時期。「根回し期間」があまりに短かったのです。

ただ、今は低金利時代なので、金融機関は現金を手元に抱えていますが、金利が正常に戻れば様子は変わってきます。金庫に札を眠らせておくのでは、預金者への支払利子ばかりが膨らむことになります。数学的に考えると、二千円札を使えば、お釣りに必要な紙幣の数を少なくできます。欧米では、二十ドル札や二十ポンド札が主力。日本でもいずれ二千円札が活用される時代が来ると思います。